④「馬が合う」

2024/11/20

白子隆志

今年の夏はパリオリンピックがあり、多くの日本人がその結果（金メダルを取れた人も取れなかった人も）に感動を覚えたと思います。

今回、その中で平均年齢 40 歳代の「初老 JAPAN」（自虐？）が馬術という競技で銅メダルを獲得したことを皆さん知っていますか？それも 92 年ぶりにメダル獲得という快挙に驚いたのと、なぜ日本人がヨーロッパ発祥の地である馬術という競技でメダルが取れたのだろうと不思議に思いました。

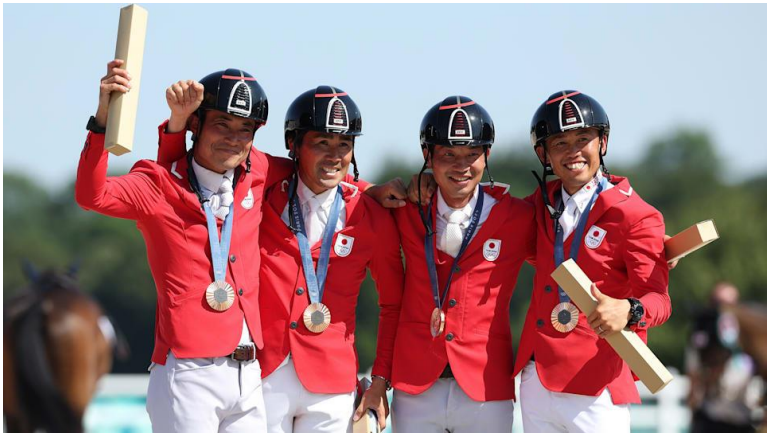
報道によると、選手たちは馬術競技を愛し、技術の上達をめざすために本場ヨーロッパに在住して練習していたという執念が実った形となったわけです。また、大会の競技中に出場予定の馬が脚を傷めたために、その馬の健康に配慮し、100 点減点を覚悟（実際はルールを誤解していて 20 点減点にとどまったという幸運も）で馬と選手交代をした勇気と決断に拍手を送らざるを得ません。

この馬術競技を観ていて、「馬が合う」という表現を思い出しました。人間だけが頑張ればよいという競技ではないので、障害物を超えたり、そのタイムを競ったりするには、乗り手だけでなく馬の協力（意思疎通・調教）が必須です。乗り手と馬の呼吸が合えば（人馬一体？）、相乗効果で良い結果が得られるという意味だと思います。

我々の社会でも「・・・とは馬が合う」というのは、「考え方やペースが一緒でやりやすい」ということで使われている気がします。団体競技や企業において、「馬が合う」人ばかりなら苦労はしませんが、実際には「馬が合わない」人もいるのも事実です。そのような場合、「合わない」から避けるのではなく、互いに「合わない」を理解したうえで、あえて近づいてみることもチームには絶対必要だと思います。

馬から逸れますが、私はチームを論ずるときに、「犬ぞり」のことをいつも引き合いに出しています。例えば 10 頭の犬が一つの「そり」引いて前に進もうとするときに、一部の犬が力を抜いたり、それぞれが違う方向に引っ張ったりすれば、「そり」は思い通りに前に進まなくなってしまいます。

「チーム医療」という言葉が一般的になりましたが、当院では「患者さん」を中心に「家族」「医師」「コメディカル」が互いに尊重しあい、同じ土俵で同じ方向を向いて頑張れているでしょうか？

「馬の耳に念仏」（どんなにありがたいことや良い言葉を投げかけても、相手が理解をしようとしない状態）にならないように、相手を尊重し、相手の意見を理解するようにしたいものです。

NHK